



地方におけるスローライフ運動のねらいと意義

—三重スローライフ協会の取り組みを中心に—

大 原 興 太 郎

1. はじめに
2. 三重スローライフ協会の設立背景と経緯
3. 「三重スローライフ協会」の目的と事業展開
4. 5つの種まき活動と考え方
5. 簡単なまとめと三重スローライフ協会の位置づけ

要約 日本におけるスローフード、スローライフの用語は1990年代後半から広まり始め、それに関する著書は2000年代に入って数多く出版された。その運動体であるスローフード、スローライフの協会の設立は、スローフードジャパンの公式ウェブサイトによれば、2009年6月末の時点でスローフード協会の国内のコンビビウムは51に達している。

ところで、スローライフに関しての組織としては、NPO 法人日本スローライフ協会（2004年9月内閣府認証）が有名である。しかし、三重スローライフ協会のNPO 法人化は2004年4月と少し早く、また、その運動の過程で「熊野スローライフ協会」が設立されているのも興味深い。

その活動はまだ不十分ながらも多方面にわたっており、高度成長期を経て蔓延してしまった持続的といえないライフスタイルを変えていく上で多くのヒントが含まれている。特に5つの種まき、スローフード、スロースタイル、スローインダストリー、スローエネルギー、スローエデュケーションにかかわるライフスタイルの提案はユニークである。

キーワード スローライフ、スローフード、NPO、ライフスタイル、持続的

原稿受理日 2009年7月15日

Abstract A term of slow food and slow-life in Japan began to spread out from the later half of 1990's, and the book which related to it was published some in 2000's. As for the establishment of an association of slow life, according to the official website of slow food Japan, convivium that means a branch of slow food association reaches 51 as of the end of June, 2009.

However, the organizations of NPO about slow life of the whole country, NPO juridical person, Japan slow life association (the September, 2004 Cabinet Office certification) is very famous. However the NPO juridical person of "Mie slow life associations" established early a little with April, 2004 and it is interesting, in addition, "Kumano slow life association" is established by a process of the exercise.

The activity is still on the way in aspects, and it may be said that many hints are included when we change the lifestyle that it cannot be sustained that has spread

after the period of the high growth of economy. Suggestion of a lifestyle to be concerned with in particular five kind seeds, a slow food, slow-style, slow industry, slow energy, slow education is unique.

Key words slow-life, slow-food, NPO, lifestyle, sustainability

1. はじめに

日本におけるスローフード、スローライフの言葉を広めた最初の本は島村奈津『スローフードな人生！』（新潮社、2000年7月）だと思われる。この本で島村は自らのイタリアでの体験を文章にして、始めてイタリアのスローフード運動を日本に紹介した。その後、エコロジカルやサステイナブルの代替語としてスローな文化論を展開した、辻信一『スロー・イズ・ビューティフル—遅さとしての文化』（平凡社、2001年9月）、多くの食と農の写真を取り入れた、ニッポン東京スローフード協会編『スローフード宣言 イタリア編』（木楽舎、2001年12月）とニッポン東京スローフード協会編『ニッポン東京スローフード宣言！』（木楽舎、2002年10月）、より一般的な普及版としての、金丸弘美『本物を伝える日本のスローフード』（岩波書店、2003年8月）、さらに、金丸弘美・石田雅芳『スローフード・マニフェスト』（木楽舎、2004年2月）、中身はほとんど食に関する情報であるがタイトルにスローライフを加えた、大谷ゆみこ『スローライフ、スローフード』（2004年4月）などが2000年代の前半に出版された。

このように、ほとんどはスローフード、食に関するものばかりである。そこから生活スタイル全般に視野を置いたのは辻信一の先の本と2003年7月に発行された辻信一『スローライフ100のキーワード』（弘文社）のみである。

スローフード、スローライフの協会の設立についても、日本でのスローフード協会の設立は、スローフードジャパンの公式ウェブサイトによれば2009年6月末の時点で国内のコンビビウムは51に達している。しかし、スローライフに関しては、筑紫哲也氏などが1990年代の終わり頃から提唱して、日本では、スローライフ・ジャパンが中心となり掛川市、高知市、岐阜市といった中小の地方都市が、「スローライフ」を宣言している。

NPOの全国組織としては、NPO法人日本スローライフ協会（2004年9月内閣府認証、本部東京、支部各地/海外）が有名であるが、三重スローライフ協会のNPO法人化は2004年4月と少し早く、また、その運動の過程で「熊野スローライフ協会」が設立されているのも興味深いところである。認知度はNPO法人日本スローライフ協会が高いが、さまざまな活動は三重スローライフ協会の方が行っており、その内容について以下に概要を示すとともにその意義について考察したい。

2. 三重スローライフ協会の設立背景と経緯^①

1) 設立の趣旨

三重スローライフ協会は2004年の1月に設立され、同年の4月にNPO法人となっている。その設立趣意書によると、設立の背景として、「世界的な大量生産、大量消費、大量廃棄に支えられた成長経済、ファーストフードチェーンに代表される食のグローバル化、化石燃料や原子力に大きく依存したエネルギー供給や6割を輸入に頼る国内の食糧供給に対する不安、急速に衰退しつつある地域の農林水産業、人間関係から地球環境までのさまざまなひずみ、こうした20世紀後半の科学技術・科学知の異常な発達に導かれた生産と生活のあり方に対する反省は、90年代のバブル経済の崩壊によって今やさまざまな面で広がってきています。」と、高度経済成長とそれがもたらしたマイナス面への認識が示されている。

そして地方の時代といわれるようになってきているものの、バブルが弾けて地方の過疎化、高齢化、地域経済の衰退が進み、地域が成り立っていく存立条件もあやうくなりつつある中で、何とか地域起こしをしようという動きもあちこちに見られるようになってきている。そこで次に、「食のあり方にとって大事な味覚の退化に対する危機感、心のゆとりを犠牲にしてきた生活への反省、地域の農業、伝統文化、自然環境を守り育てる必要、を感じている人々は増えつつあります。ファーストフードなどを単に否定するのではなく、顔の見える関係の中から、地域の食材や自然素材をもっと生かそうという人たちも少数派ではなくなりつつあります。これらは、太陽、水、土、農、食、環境といった私たち生命にとってより根源的なものへの目覚めでもあります」との認識を示している。しかし、こうした新しい動きを「真に私たちのものにしていくには組織的な運動体が必要です。私たちは将来世代のためにもこうした動きを一層進めていく使命を負っていると考えます」として運動体としての三重スローライフ協会の設立につながるのである。

それでは三重スローライフ協会は何を目指しているか？ それは、「こうした多様なあり方、過程や取り組みの姿勢を大事にするあり方は、もう一つの生き方（オールタナティブライフ）につながっていくといえましょう。つつましやかでしなやかな生き方、生きるための仕事、生活のための技術、歴史と伝統と風土に育まれた食生活を始めとした生活の知恵、人と自然との厳しくもやさしい関係、人と人との育ち合う関係、人間もまた生物であることを自覚し、心と体の統一性を大事にできる身体性の重視、自己否定や自己憎悪を

しなくてよい自然体の回復，こうした事柄は生態系と調和し，持続可能な（永続性）ものの意味を含む「スローな生き方」という方向性の先にしか生まれえないのではないのでしょうか。」（設立趣意書）

「この生命を育む食のあり方を基本としたスローライフの方向は，単なる理念や，はやり言葉に名を借りた新しい儲け口などというのでは長続きしません。人々が長い間に積み上げてきた身土不二や自然と共に生きる知恵に学びながら，便利さや惰性に流されがちな私たちの弱い部分を克服し，夢や新しいあり方に向かって協働していくことが求められます。その点では世直し運動であり，改革運動であるといえるのかもしれませんが」と，運動として進めることを明言している。さらに，

「このような新しい事柄に取り組もうとする人たちは，確かにより多くの仕事を抱え，忙しくしていることも事実です。そこで私たちが世の熱狂的な改革者にありがちな性急さ，過労，不寛容，あせり，いらだち，洪面などをしていたらそれは自己矛盾です。生物のしなやかさ，現場のたくましさ，多様性の強靱さに学びながら，グローバル化に振り回されるのではなく，生きていく糧や生きざまを私たちの側に取り戻していく必要があります。それは過去を素直に見つめ，将来に希望を持ち，現在を楽しみながら「充実した今を共に生きる」中で達成されていくものと思います。」と戒めを自覚している。

こうして，この運動を組織的に推進し新しい生き方を定着させていくために，地域の観光資源ともなりうる食を中心とした地域の文化を調査研究し，食農教育，環境教育を進め，地域にある資源を地域の中で安全に循環させる仕組みを提案し，実行していくことを中心的事業内容とした，特定非営利活動法人三重スローライフ協会が設立された。

2) 協会設立に至る経過

平成2年11月，農事組合法人・伊賀の里・モクモク手作りファームとその仲間達が，三重県村づくり加工事業連絡協議会（通称うまいもん探検隊）を結成し，農村の加工事業の応援活動を始める。平成4年9月「伊勢の国村人づくり」統一ブランド化を行い，県内の農産加工品の販売を開始する。そして，平成6年夏の「まつり博・三重'94」に出展参加を行う。

その後，平成14年4月には，三重県村づくり加工事業連絡協議会を解散して，三重県村づくり産品ブランド推進協議会を発足させ，加工事業の発展とネットワーク化を模索する。このような運動の発展を意図して，平成15年1月には「遺伝子組み換え問題に関する講演会」主催したり，同じく平成15年3月には「三重まるみえ地産地食交流会」を主催し

て、そこに日本のスローフードの第一人者、島村葉津氏を講師に迎えた。この講演会が大きなきっかけとなり、三重という地方からスローフード・スローライフの運動を起こそうという動きが活発になり、4月以降、毎月1回以上の設立準備会議が開かれ、2004年の1月11日の三重スローライフ協会の設立、同年4月の非営利活動法人の資格の取得となる。

3. 「三重スローライフ協会」の目的と事業展開

NPO 法人三重スローライフ協会は、未来に向けてより望ましいライフスタイルを提案し、その実現に向けた活動をする中で、食農教育、環境教育、地産地消運動に関する事業を行い、もって食、農、環境に対する意識を向上させると共に、地域資源を地域の中で安全に循環させる仕組みを形成することを目的としている。

定款によれば、主な事業は、

- (1) 食農教育、環境教育に関する事業
 - (2) 地域資源を地域の中で安全に循環させる仕組みを推進する事業
 - (3) 地域の農林畜水産物及びそれらの加工品の企画・開発・販売
 - (4) 地域の伝統的な生活文化を守り育て、普及する事業
 - (5) 各種業者の地元素材を扱う比率の調査、研究、発信
 - (6) 地域の観光資源の研究及び普及に関する事業
 - (7) ライフスタイルの提案に関する啓蒙・販売事業
 - (8) 上記(1)～(7)の項目に関するイベントの開催
 - (9) 上記(1)～(8)の項目に関する情報誌、出版物、教材等の発行、販売
- である。

具体的には、県内の飲食店・レストラン・ホテル・旅館等で消費されている食品の地場産度の調査、「道の駅」周辺の観光関連施設調査などの「調査・研究」事業。食農教育や会員参加型のフリーマーケットを主とした「イベント事業」。日常でのライフスタイルの無駄を省くためのコインなどツールを利用した「リサイクルシステム」事業。熊野古道が世界遺産に登録されることを記念した写真集DVDの「出版」事業。三重県の受託事業「紀南中核的交流施設の基本構想策定」などを行った。

また、平成18年度は農林水産省『民間における食育活動促進支援事業』および経済産業省『企業・市民等連携環境配慮活動活性化モデル事業・環境コミュニティ・ビジネスモデル事業』を受託して食育と環境ビジネス事業に取り組んだ。

地方におけるスローライフ運動のねらいと意義（大原）

このような活動経過を時系列的に新しいものから羅列してみると以下のごとくである。
右欄のマークは活動の分野を示している。大まかに3つに分けています。

種…協会の5つの種まき活動

緑…緑育活動

食…食育活動

.....
〈2008年〉

10月 ベルファーム収穫祭に参加，縄絢機（なわないき）を展示 種

9月 ピーター・D・ピーダーセン氏，講演会「ロハスの経営の4大メリット」開催
[旬の夏野菜を使った料理教室]開催 食

8月 [夕涼みのキャンドルナイト]開催 種

7月 [旬の夏野菜を使った料理教室]開催 食
第5回通常総会開催

「風呂敷講習会」開催 種

6月 「いばらまんじゅう作り」開催（松阪 松江小学校）食
「手作り水餃子教室」開催 食

庭園ボランティア活動 緑

「手作りこんにゃく講座」開催 食

3月 ジャム作り（いちご）食

地産地食イベント（生あおさ）開催 食

「手づくり味噌講座」開催 食

庭園ボランティア活動 緑

2月 第4回農業学習会開催 緑

「五感を使った食育講座」開催 食

庭園ボランティア活動 緑

奥野食品感謝祭「納豆祭り」開催 食種

1月 「冬野菜を使った身体に優しい料理教室」開催 食

餅つき（のし餅作り）食種

ジャガイモ収穫 緑

大根収穫 緑

庭園ボランティア活動 緑

「冬野菜を使った身体に優しい料理教室」開催 食

〈2007年〉

12月 ジャム作り（紅玉りんご） 食

「松阪牛すじ肉と大根の大鍋会」開催 食

松阪菊展示会開催 緑

松阪牛すじと大根汁の販売 食

ジャム作り（紅玉りんご） 食

第3回 植樹 緑

庭園ボランティア活動 緑

マイ農園タマネギ苗植え 緑

第3回農業学習会開催 緑

「食文化祭」開催 食

11月 マイ箸袋作成・販売開始 種

「落花生収穫祭」開催 緑

地産地食イベント（はたけシメジ）開催 食

ジャム作り（紅玉りんご） 食

マイ農園実エンドウ・スナックエンドウの播種 緑

「収穫祭」開催 食

10月 庭園ボランティア活動 緑

「ジャガイモの芽かき体験」開催 緑

9月をエコ月間として様々な取り組みを行なった。

エコクッキング・エコロジーマーケット・省エネルギー教室・エコお買い物教室

開催 食種

「稲刈り&おはぎ作り体験」開催 食緑

「お茶摘み体験&松阪牛農家交流会（松阪市飯南町）」開催 食

マイ農園白菜キャベツ苗植え 緑

新米フェア開催 食

9月 マイ農園大根播種 緑

マイ農園作付け学習会開催 緑

第2回農業学習会開催 緑

地方におけるスローライフ運動のねらいと意義（大原）

- 「ジャガイモ種芋植え付け&わらび餅づくり」開催 食緑
ジャム作り（桃、梨）食
庭園ボランティア活動 緑
地産地食イベント（モロヘイヤ）開催 食
竹灯夜キャンドルナイト開催 種
- 8月 マイ農園トウモロコシ収穫 緑
ジャム作り（桃）食
地産地食イベント（モロヘイヤ）開催 食
スローな演奏会開催 種
「夏野菜を使った身体に優しい料理教室」開催（7・8月）食
「昔懐かしい手づくり教室」開催（竹とんぼ・水鉄砲・大じゃぼん玉作り）（7・8月）種
庭園ボランティア結成式・活動開始 緑
- 7月 七夕イベント開催 食
スローな演奏会開催 種
地産地食イベント（赤菜）開催 食
第1回農業学習会開催 緑
ジャム作り（カラマンダリン）食
ミニバラ教室開催 緑
- 6月 ベルファーム庭園ボランティア募集・取り組み開始 緑
「田植えといばら餅作り」開催 食緑
- 5月 木工教室開催 7種
春のスローマーケット開催 食緑種
- 4月 ㈱松阪協働ファーム（協会は5社中1社として参画）が指定管理者として松阪農業公園ベルファームの運営を開始
協会機関紙「スローなお便り」9号発行
- 3月 リキッド事業経済産業省 成果発表会参加
第2回小田急エコロジーセンター視察（リキッド飼料の取り組みを学ぶ）
リキッド事業学習会開催
- 2月 食育教本「自炊のススメ読本」作成・配布
第2回食育講演会開催（三重大学）

平成19年1月 協会機関紙「スローなお便り」8号発行

(株)松阪協働ファーム（協会は5社中1社として参画）ベルファーム指定管理者決定

2006エコプロダクツ展 リキッド活動報告 東京ビックサイト

〈2006年〉

12月 第3回食育モニター学生研修会（県立相可高校食物調理科との交流）

小田急エコロジーセンター視察（リキッド飼料の取り組みを学ぶ）

第2回食育モニター学生研修会（美杉伝統食を守る会 IN 美杉町）

11月 九州視察（リキッド飼料の取り組みを学ぶ）

秋のスローマーケット開催（松阪 ベルファーム）

10月 第1回食育講演会（三重大学生物資源学部大講堂）

9月 第1回食育モニター学生研修会（伊賀の里モクモク手づくりファーム）

国際ミニシンポジウム開催（熊野）

ドイツ視察（資源循環社会の形成を目的にして）

第1回食育活動会議（三重大学）

協会機関紙「スローなお便り」7号発行

7月 第2回リキッド研究会開催（松阪 ベルファーム）

平成18年度農林水産省 民間における食育活動促進支援事業受託

テーマ「楽しく体に優しい若者の自炊促進教育

—食事バランスガイドの利用による若者の食生活改善—

・平成18年度民間における食育活動促進支援事業成果報告書（PDF ファイル：205KB）

・作成冊子「自炊のススメ読本」（PDF ファイル：4.8MB）

平成18年度経済産業省

企業・市民等連携環境配慮活動活性化モデル事業・環境コミュニティ・ビジネスモデル事業受託

テーマ「食品系未利用資源を活用した養豚向けリキッド飼料化事業」

・調査研究報告書（PDF ファイル：2.1MB）

・スローなお便り第9号掲載資料（PDF ファイル：2.4MB）

6月 第3回総会開催（松阪市民活動センター）

地方におけるスローライフ運動のねらいと意義（大原）

- 春のスローマーケット開催（松阪 ベルファーム）
会員月例会「日本百選 三多気の桜を見に行こう IN 美杉」
協会機関紙「スローなお便り」6号発行
- 4月 第1回リキッド研究会開催（松阪 ベルファーム）
会員月例会「草餅名人の技に学ぶ講習会開催」
- 3月 「おかえりコイン」基金で旧宮川村被災地に第2回目の植樹。
循環型社会を考えるリキッド飼料学習会開催（松阪 ベルファーム）
- 2月 会員月例会「日本のスローフード 一揆みそ作り講習会開催 IN 一志町」
- 平成18年1月 会員月例会「草木染体験と相可高校の生徒さんとの交流会開催 IN 多気町」
会員月例会「スローライフクイズ大会開催 IN 三重大学」

〈2005年〉

- 12月 協会機関紙「スローなお便り」5号発行
リキッド飼料農場視察 岐阜県丹生川村ロッセ農場
会員月例会「ローカル線で行くスローフードな秋の旅開催 IN 美杉村」
- 11月 「おかえりコイン」宿泊施設にてハブラシの取り組みスタート
秋のスローマーケット開催 芋掘り交流会（松阪 ベルファーム）
協会機関紙「スローなお便り」4号発行
- 10月 会員月例会「スローフードレストランで収穫の秋を楽しむ会開催 IN 野の花亭」
- 8月 会員交流月例会スタート「宮川村の環境学習会開催 IN 宮川村」
平成17年6月 第2回総会開催 さつま芋植&会員交流会開催（松阪 ウェストパーク）
協会機関紙「スローなお便り」3号発行
- 3月 春のスローマーケット開催（松阪 ベルファーム）
スローな情報交換会 in 伊勢・河崎
協会機関紙「スローなお便り」2号発行。
- 2月 「おかえりコイン」基金で宮川村被災地にもみじ等を植林。
平成17年1月 「紀南中核的交流施設基本構想」県に提出。

〈2004年〉

- 11月 松阪農業公園ベルファーム「牛まつり」出展。宮川もみじ募金開始。
県・地産地消情報基盤整備事業の調査団体として参加。(平成17年3月迄)
「やさしいごはん」矢田勝美展を関町のギャラリー而今禾(じこんか)で開催。
- 9月 協会機関紙「スローなご便り」創刊号発行。
- 8月 「中央卸売市場東海・北陸ブロック会議・ベルファーム視察」で木村理事が講演。
(於：時のふどう)
「おかえりコイン」システムをモクモク農場レストラン(鈴鹿・松阪)で開始。
熊野古道の世界遺産登録を記念して、矢吹紫帆さん(音楽)・森武史(写真)の
コラボレーションによるDVD写真集を発売。県内道の駅・大型書店等で販売
- 7月 「おかえりコイン」システム 奥野食品(国産大豆にこだわった納豆生産会社)の
直営店にて実施。
熊野プロジェクト事務局を熊野市内に開設。
- 6月 協会ホームページ立ち上げる。 <http://www.okaeri.info/>
「おかえりコイン」システムをモクモク手づくりファーム Papa ビアレストラン
にて開始。
大原理事長による「スローライフ研究会」始まる。
以降、月1回第2上曜日の午後(原則)に三重大学において開催。
久居市駅から松阪駅までの約18kmを協会理事と会員の10数名が歩く。
2004伊賀びと委員会主催の「ええじゃないか伊勢詣」に1日友情参加。
- 5月 服部学園理事長 服部幸應氏、日本東京スローフード協会 金丸弘美氏を講師に
迎えて設立記念総会&講演会を松阪コミュニティ文化センターにて開催。
「三重のスローフードな縁会」を開催。
協会内で熊野プロジェクトを作り、基本プラン作成を目指して活動。
- 平成16年4月 紀南中核的交流施設の基本構想策定事業者に決定。

4. 5つの種まき活動と考え方

1) 5つの種まき活動

三重スローライフ協会の目的は「未来に向けてより望ましいライフスタイルを提案すること」であり、その実現に向けて「食農教育・環境教育・地産地食運動に関する事業」を

行うことである。この場合、望まじき方向性は、高度経済成長期に失いかけている「自然と地域と人を大事にする」方向でのライフスタイルの提案である。そのために協会は5つの種まきと称する取り組みをしている。その5つとは「スローフード（自然と伝統の味覚を育てる種）」「スローイングダストリー（環境に配慮した地域産業を育てる種）」「スロースタイル（ゆったりした循環と生きがい育てる種）」「スローエデュケーション（食農や環境を学んでいく種）」「スローエネルギー（資源について考える知恵を育てる種）」である。以下は、5つの種についての、協会のホームページの簡単な説明である。

NPO法人
三重スローライフ協会の
5つの種

物質的豊かさを肯定し、私たちが得てきたモノと失ってきたモノを融合し、もう一度、“なつかしい未来”という文化的・精神的ものさしによって、新しい価値観や心地よい関係の再生を提案していきます。私たちの活動は、大きくわけて5つの種を育てていきます。そのひとつひとつは、ニッポンを明るくあったかくする種です。三重スローライフ協会のまく種は、新しい生き方を育む種なのです。



スローフード

自然と伝統の味覚を育てる種

「歴史と自然と風土に育まれた三重の食文化を見直しましょう」をスローガンに、三重県の大切な郷土料理を後世に残し、地産地消を実践します。伝統的な手法でつくられた安全な食品・食材を守り、家族や仲間と一緒に囲む、楽しい食事のひとときを大切にすることを提案していきます。



スローイングダストリー

環境に配慮した地域産業を育てる種

「豊かな自然と共生できる農林水産・観光のなりわいを始めましょう」をスローガンに、環境に配慮した生産・流通のしくみを築くことをめざしています。農に親しむ市民農園やグリーンツーリズムを広めたり、価値ある貴重な伝統産業を継承していきましょう。



スロースタイル

ゆったりした循環と生きがい育てる種

「無駄がなく便利さに流されないシンプルな生き方を探しましょう」をスローガンに、日常生活の中の過剰を見直したり、資源に配慮した循環型の生活スタイルを実践していきます。加齢とともに人にやさしくなり、生きがいも大きくなる生き方をめざしたいですね。



スローエデュケーション

食農や環境を学んでいく種

「自然に学び、先人に学び、すべての命に学びましょう」をスローガンに、生きることの基本である「食」について学んだり、屋外に出て大自然に学びます。世代を越えた交流から歴史・民俗・伝統なども学んでいきます。



スローエネルギー

資源について考える知恵を育てる種

「限りある資源から限りない資源へと切り替えていきましょう」をスローガンに、エネルギーの浪費につながる快適さや便利さを見直したり、先人の作りだした季節ごとのしつらひを見習うことから始めていきます。環境に配慮した自然エネルギー（風力・太陽光発電、バイオマス）を普及させることにも力を注ぎます。

2) 機関誌にみる考え方

① 21世紀を生き抜く知恵を将来世代に

生命を育む自然、歴史と風土に培われた地域、そして生きている充実を感じさせてくれる人々、これらの20世紀後半に人類が失いかけたあのなつかしさを、そして私たちの先人たちがつないできた知恵を取り戻し、21世紀を生き抜く知恵として将来世代に伝えていきたい。一人一人がパソコンやiモード携帯で広く世界とつながることができるような新しい装いをもって、あたらしい生活スタイルを提案し「懐かしい未来」を創っていききたい、それが私たちの行動目標です。

こうした流れを創り出してきたモクモクを始めとした新しい「農」「食」「生き方」を探索してきた三重の農業者や農業団体、そして独立自営の精神で活躍する中小企業の方々、さらにはこの運動を支え、担っていかうと集まっていたいただいた県内をはじめ全国の個人や団体の方々、「なつかしい未来」は正に私たちの手と意欲の中にあります。

スローな食文化—フード、生き方—スタイル、産業—インダストリー、教育—エデュケーション、エネルギー—といった未来への種を播き、それを育てていけるかどうかは私たち一人一人の取り組み次第です。唯一の専任の事務局長²⁾立岡氏を活動の中心として、理事一人一人は本務の合間をぬってそれぞれの持ち場でさまざまな提案をし、みんなと一緒に実行していきます。この運動をどこまで広げて大きなうねりにしていけるかどうかは、会の趣旨に賛同頂いた皆様方の協働行動に寄るところが大だと思っています。

この運動の拠点三重の中では文化の香りの高い松阪に置いたことも一つの縁のように思われます。ご承知のように英語で文化を指すカルチャーは農耕と語源が同じです。すなわち、そこにあるものに手を加え、磨き価値のあるものにしていくという共通項がありま

す。そして「生命」の営みによって成り立つ「農」は、本来、生命、生活、人生・生き方と深く関わっていることも今一度思い起こしてみたいものです。それぞれの地域の風土性に根ざした農を大事にし、正に私たちの住む地域の問題を根っこに据えながら、全国へ世界へ発信していけるような、そうした質の運動を共に創っていきましょう。

また、三重スローライフ協会が農耕の神様である豊受大神宮（伊勢神宮）や自然の神々と共にあった熊野信仰の土地で産声を上げさせてもらったことは、高度成長の過程でござり高ぶって自然を破壊し続けてきた私たちの心を戒め、謙虚に未来への良き種を播き、育てる上でも有り難いご縁だと思っています。

当スローライフ協会の最初の大きなプロジェクトとして動き出した「紀南中核的交流施設の整備に係わる基本構想」策定の事業はまさに私たちの存在理由を問われるものになるうかと思われます。「なつかしい未来の風が吹く・熊野なりわいエコロジーファーム」が三重におけるスローライフの一つのモデルになるよう多くの人々の知恵と努力が結集されることを願っています。合掌。（機関誌創刊号〈機関誌の発刊に際して、2004. 9. 1〉）

② 求める「懐かしい未来」とは何なのか

今年産声をあげたばかりの私たちの活動は今やまだよちよち歩きの段階です。生き生きした活動をするには、人々が作る組織もまた生物体に習って、外から活動のエネルギーを取り入れ、咀嚼し、外に向かって提案していく必要があると思います。協会のいくつかのキーワードは、中心的に動いてきた人間（理事）の中で、今年の準備段階から討議を繰り返して一致点を見だし、パンフレット等で表明してきました。

しかし、スローライフあるいはスロー×××という言葉は、頻繁には使われるようになったものの、人によって抱くイメージに大きな差があります。そしてその言葉のあいまいさが不必要な混乱を招いていることもあります。もちろん新しい動きを反映した新しい言葉は、最初は必ずしも確定したものではなく、時間の経過と共に固まっていくのが常ですが、私たちの思いや内容を表す的確な「言葉のイメージを共有」していくことは大切なことだと思われまます。そのための検討素材を提供していきたいと思ひます。

まず、最初は私たちが掲げている、あたらしい生活スタイルを提案し、「懐かしい未来」を創っていく、とはどういうことなのかを考えてみましょう。スローフードやスローライフという言葉と運動がどのようにして生まれてきたのかを考えるとこの点は明らかです。周知のようにそれは基本的には20世紀後半の社会経済、生活の大きな変化の中で生まれてきました。フォードシステムにみられる大量生産・消費・廃棄型のゆたかな社会の登場と

市場の世界化により、規格化され画一化された安価な製品が世界に行き渡ると同時に、それぞれの地域にあった伝統的な食品や文化が急速に衰微してきました。一般の人々の生活、農民も含めてその自給的な部分が急速に縮小すると同時に、市場経済に深く巻き込まれていく程度に応じて地域農業・地域産業の存続が困難になってきました。当然のことながら市場競争に勝てない部門や産業は撤退を余儀なくされ、農業をはじめとした自営業に大きなダメージがもたらされました。

食の面では、ファーストフードにみられるこうした単に便利で手軽な食のあり方に疑問をもち、それぞれの風土と歴史に根ざした農と食のあり方をもっと大事にすべきではないかという動きがイタリアで1986年に始まったスローフード運動です。もちろん日本でもいわゆる近代化路線に継承をならし、オールタナティブライフ（もう一つの生き方）を探る試みは産直や郷土食復興などにみられました。しかし、こうした高度成長期の反省が国民的レベルに進んでくるには、バブル経済の崩壊によっていよいよこれまでのやり方ではダメかも知れないという認識が広がってきた90年代後半から21世紀に入っていることです。

それでは古き良き時代の最後と考えられる60年代以前に戻ればいいのでしょうか。よほどの経済基盤の崩壊に出会うなどのことがないかぎり、もはや完全に車なし、電化製品なしの生活に戻るなどほとんど不可能です。歴史は後戻りすることができません。かつてのよき時代のエッセンス（本質）から学ぶことは可能でしょうが、単に昔に戻ることはできず、私たちは前に向かって進まざるを得ません。この場合、人々が貧しくても地域のことを大事にし、人々との付き合いを大事にして、生活や地域の持続性が疑問視されることのなかった時代のマナーやあり方を振り返ってみることが必要ではないでしょうか。

こうした人間にとっての大事な部分を呼び起こしながら、現代的な技術などを適切に使って新しい時代の生活スタイルを提案していくこと、それが「懐かしい未来」の意味ではないかと思います。こうした運動は単に食や農の部分のみならず生活の全面にわたってします。そこで新しい時代にふさわしい社会や生活のあり方をみんなで考え提案していきたいのです。私たちが今あるのは先人たちの努力の賜物であることを感謝し、将来世代に少しでもよい環境や基盤を残していきましょう、という思いが「なつかしい未来」への志向の中に宿っていると思うのです。（機関誌第2号，2005.2.1）

③ 食・農・環境を学んでいく種まき—OKAERI ビレッジに学ぶ—

5月31日（2005年：編集注）三重スローライフ協会の有力メンバーであるモクモク手づくりファームの滞在型食農学習施設「OKAERI ビレッジ」の開村式があり、出席させて

いただきました。雑木林のしっとりした佇まいの中にどっしりとしたドーム型の石造コテージがバリアフリーの2棟を含めて39棟並び、腰掛タイプの研修棟とフロントを兼ねた座り机タイプの和風研修棟が坂を上った入り口付近に備わっています。丸屋根の天井はガラス張りで寝ながら星が見えるようになっています。また、宿泊棟のゴミはチェックアウト時にゴミステーションに持っていき分別して捨てるなど、宿泊者はビレッジの住人として出来ることをやるという仕組みが作られています。

ビレッジへのアプローチの街灯などの電源には太陽光パネルと小型の風力発電2機が使われていて、各棟の電気の使用状況はフロントで一覧出来るようになっています。31日の宿泊でも、早くにチェックインしてエアコンを使っていた人とエアコンなど使わずおそらくテレビもつけなかった人では一晩の電気使用量が1対10というほどの違いがありました。それが即座に分かるようになっていて、省エネの程度が数値で明示されているのは、特に子どもたちには教育効果も大きいと思われます。

モクモクではこれまでも動物とのふれあい体験やウィンナーやパンなどの手づくり体験などを日帰りメニューで提供されていましたが、宿泊施設ができ、「モクモクジャージ牧場」が開設されたことによって、そのメニューは質的な飛躍が期待できると思われます。生命の営みから私たち人間の食や生活素材を得る広義の「農」について、季節のサイクルはもちろんのこと、日夜の生命の営みに即した農作業の過程をつぶさに経験することもできます。

朝早く起き、子牛に餌をやり、生まれたての子牛には母牛のミルクを子牛の体温にまで暖めて飲ませたり、乳搾りによって搾りたての牛乳の暖かさを経験したり、乳牛のウンチが柔らかいのはお乳を出すために水分をたくさん取るからだと言ったり学んだりできます。スーパーなどに売っている牛乳は腐敗を防ぐために冷たくなっているため牛乳とは元々冷たいものだと思っていた子は、搾りたての牛乳の温かさを発見して生命の息吹を感じることでしょう。生まれたオスの子牛は間もなく売られて成牛になることなく他のものの命の糧になるということを学んだ子どもは、私たちの生命が多くの生物のお陰（犠牲）の元に成り立っていること感じ、食を前にして「いただきます」という気持ちが自然に出てくるのが期待されます。

酪農は実は多くの大学や農業高校でも行われていたのですが、近年になってその世話のたいへんさからめんどろな乳牛を辞める場合が多かったのです。私が今農場長をさせてもらっている三重大学農場も12—13年前までは乳牛がいました。残念ながら、その復活はとも叶いそうにありませんが、今やその「手のかかる事柄」から学ぶことの重要性はより

増してきているのではないかと思います。お膳立てをした田植えや収穫の体験は何にもないよりはましかもしれませんが、逆にその間の生命過程とそれに即した農作業過程の全体を理解するチャンスをなくしているとも言えるのです。

このように「自然に学び、先人に学び、すべての命に学ぶ」(天習地学)中から生きることの基本である「食」のありようを学ぶこと、世代を超えた交流から歴史や民族や伝統を学んでいくことが今ほど求められていることはありません。特に自給的・持続的なマナーで生きていた人々から直接学ぶことは歴史的に見てあと10—20年の猶予しかないのです。農村人口が減少し、農家の子弟ではあっても農業の手伝いもしない、できない現在の仕組みの中では、このような本格的な食や農や環境の学習施設の必要性はますます大きくなると考えられます。〈機関誌第3号, 2005. 6.12〉

④ おかえりコインを通して新しいライフスタイルの提案を

ほんの半世紀足らず前までは、日本ではモノを活かしきる生活のしくみと人々のつつまじやかな生き方が健在でした。モノは機能がダメになるまで繰り返し使われ(再利用)、少しの故障は修理して使ったり、使い方を替えて使う(カスケード利用)ことが普通でした。包丁はたいてい自分で研いで使っていたし、時々砥ぎ屋に出すこともありました。今や切れが悪くなるとそれを捨てて買い換える人が増えてきています。自転車でもパンクすると修理屋に持って行くより捨ててしまう人もでてきています。

使い捨てが増えるのは、その時その時がよければよいという刹那的な生き方の蔓延とそれを可能にする経済(大量生産によるコストの安さや使い捨てを助長するムードなど)があるからだと思います。多くの人が気づきながらも「モノを活かし大事にする」行動に踏み出せないでいます。こういうときこそ新しい生き方の提案をする私たちのような運動体が必要です。気づいた人が流れと新しいしくみを作っていくのです。今回のマイ歯ブラシ運動もホテルや旅館には使い捨ての歯ブラシがおいてあるのが常識という点に着目し、旅行にも自分の歯ブラシを持ち歩くスタイルを自分たちのものとし、使い捨ての部分減らし、その節約できる部分を環境活動等に生かそうというのです。

私たちの「おかえりコイン」を通した新しいライフスタイルの提案は、生活者としての私たち一人一人が少しだけ手間を惜しまず、他人や環境のことを少し考えることによって広まっていく性質のものです。さあ、みんなこの運動の輪を広げましょう。〈機関誌第4号, 2005. 9.25〉

⑤ 環境に配慮した地域産業を育てる種まき—農村産業を考える—

私たちの五つの種まきの一つであるスローインダストリー（農村産業）は何をイメージされるだろうか。まずは農業や観光業などが思い浮かぶと思いますが、課題は「スロー」に込められた低環境負荷性、自然循環性、省エネ・省資源性、持続性などをどのように担保できるかです。同じ農業であっても環境保全型農業や有機農業やさらには自然農法といった方向性の農業であることが必要です。さらには廃棄するモノを少なくして利用できるモノはできるだけ利用するという経済行動が、1993年の環境基本法、2000年の循環型社会形成法、及び食品リサイクル法（2001年5月施行）などの法律に押される形で話題になってきています。

去る11月に仲間と見学に行った飛騨高山の種豚常時2,000頭（年間出荷48,000頭）を擁するロッセ農場は21世紀の農村産業を考える上でたいへん参考になります。次項（カット）で詳しく紹介されているように、東海地域の食品産業の副産物を集め、生育に合わせた栄養素を付加して成分調整をし、コンピューター制御によるリキッドフィーディング（液体飼料給餌法）養豚経営をしているのです。国内でこのバイプロ（バイプロダクト・副産物の略）養豚システムを取り入れているのは四経営とのことです。リキッドにするシステムやリキッドの飼料ベースを保存する貯蔵施設等、設備費がかなりかかりそうですが、管理や保存が容易になることから衛生管理も完全で、肉質も格段に向上しています。給餌のシステムが変わるだけでなく、豚舎をウインドレスにして厚い断熱層であまりエネルギーをかけずに保温できる構造にし、外が零度以下の冬でも豚舎内は十数度に保てるように環境制御されています。また、子豚の床のスノコ、糞尿の処理法、冷たい空気を緩和して喚気する方法等々随所に工夫もみられました。

設計からから施工までドイツ人の技術者の指導の下に行われた施設構造は金をかけるところとかけないところを峻別して、目的に対する機能的合理性とコストカットをうまく達成しているように思われました。日本の補助金による建築物などでは必要な機能以外に金をかけている施設も多いのですが、何に金をかけるかはまさに経営理念が問われるところ

です。

昔人間のせい、ウインドレス豚舎の反自然性には後ろ髪引かれながらも、現行の社会システムと消費者ニーズをふまえて食品循環資源を活かすにはこのようなシステムがもっと広がるのが望ましいといえます。いざ、このような経営に取り組むとなれば解決すべき課題は多いでしょうが、十分にチャレンジするに足る未来性があると思われま

す。〈機関誌第5号、2005.12.12〉

⑥ スローフード発祥の地、イタリア・ブラ訪問

3月13日（2006年：編集注）から一週間の時間が取れたので、前々から一度訪問してみたいと考えていたスローフード発祥の地、イタリア・ブラ（Bra）を訪問しました。セントレアからパリ直行便を利用し、リヨン経由して汽車でイタリアのトリノに入り、そこからレンタカーを借りて、地図を頼りのぶっつけの訪問です。

ブラに着いてまず Information を探し、そこで対応してくれた Mr. Fabio Cilti がたいへん親切でブラの歴史やアグリツーリスモ及びスローフード協会の資料もくれたので大いに助かりました。昼休み前に説明を聞けたので、1時から3時までの昼休みの間にスローフード協会国際本部の隣にあるイタリアスローフード協会が経営するスローフードレストランで昼食を取りました。レストランは町並みから門を入った古い建物にあり、中はきれいに内装されていました。そのイタリアスローフードレストランに日本人が働いていたのはまったくの驚きです。昼食は軽く細麺パスタと煮野菜などにしましたが野菜がおいしかったです。

ブラにあるスローフード関係の店は3店（生産者直売店、加工品販売店、葡萄酒販売店）あり、いずれも16時半から19時半が開店時間になっていたもので、その間に近郊のブドウの生産地を見に行きました。ポー川上流の Tanaro 川の南側 Lange 地方が赤ワインの産地、北側の Roero 地方が白ワインの産地だといえます。その一帯が同時に550のアグリツーリスモの民宿地帯になっていて、Bed & Breakfast の看板があちこちにみられました。

スローフード協会〈Slow Food International Association〉は1986年にイタリアで生まれた利益を目的としない国際協会です。現在 Bra に事務局があり、80,000人以上の会員が104カ国5大陸にわたって活躍しています。支部はコンヴィヴィウムと呼ばれ、世界に750あるということです（協会パンフレット—英語・日本語を参照）。スローフードは食の倫理と人間の喜びをつなぐものとしてエコ・ガストロミー（環境に優しい美食学？）を提唱しています。味覚のバリエーション、手づくりの食品、小さな農業、持続性のある漁業と畜産を目指しています。

スローフードは食の文化的意義を取り戻し、味覚教育を推進し、生物多様性を取り戻す、ことを目指しています。そしてそのために2003年末よりトスカーナ州との共同作業でこうした活動のための基金を創設しています。この他、味覚と文化のメッセンジャーのための国際雑誌「スローフード」は季刊誌で6カ国語（英語、イタリア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、日本語）に翻訳されています。さらにスローフードに関する世界唯一の

大学（The University of Gastronomic Sciences）を持ち、Pollenzo と Colorno の二つのキャンパスに世界中から学生を集めています。修士課程や講演会、会議、セミナーや集中講座など会員と食部門の専門家たちが参加する場も提供されています。

陸続きでたやすく他国からも人を集めることが出来、休暇の制度とそれを楽しむライフスタイルが確立しているヨーロッパとは異なることも多いですが、私たちの運動の将来を考えていく上で参考になることも多々みられました。（機関誌第6号，2006. 5.15）

- ⑦ 食育事業〈楽しく身体に優しい若者の自炊推進教育—食事バランスガイドの活用による若者の食生活改善〉の中間評価—このユニークな食育のネットワークをさらに充実発展させたい—

今年度の農林水産省「民間における食育推進支援事業」にスローライフ協会のプロジェクト〈楽しく身体に優しい若者の自炊推進教育—食事バランスガイドの活用による若者の食生活改善〉が採択されたことによって、私たちの五つの種まきの一つ地産地食—自然と伝統の味覚を育てる種まき—運動もあらたな展開をみせています。三重を含む東海地方は東北地方や九州地方などに比べると外食産業やコンビニの発達度が高く、県の自給率は全国平均と同じ40%程度であり、家庭での料理も洋風化が進んでいます。このような環境下で、都市の若者、特に親元を離れた若者に自炊の楽しさを理解し、技能を磨いてもらって食生活の改善に役立て、その過程で地域の食材や伝統的な調理にも感心を持ってもらいたいというのが私たちのねらいでした。

第二回目の食育講演会と二回目のモニター学生の食生活調査、最後の食育教本の作成を残すのみで、順調に企画は進んできました。学生諸君の忙しさなどもあってモニター研修に継続的に出てもらう学生さんが少し少なくなったりということがありましたが、食生活の実態調査、伝統食に触れ、相可高校の食物調理科のみなさんと合同の調理実習など楽しく学べる機会の中で、少し食の自立と自覚のチャンスができ、食のあり方への意識づけがだいふ進んだのではないかと思います。

取組により期待される効果として想定していた、①若年層のバランスの取れた食生活への意識付けと自炊能力の向上、②三重の伝統食への理解や伝承、地産地消への理解と地場産への動機付け、③モニター学生の日常の食生活把握と栄養士等による食生活評価と改善誘導については一定程度の成果が達成できています。④食育講演会やモニター学生を通してその他学生等への食生活改善の普及がどのようにできるのかは今後の課題です。

ここまでの取り組みで一番良かったのではないかなと思えるのは、⑤従来の枠を超えた地

域間又は世代間交流による食育運動を発展させるための地域的・恒常的なネットワーク形成のきっかけがつかめたことです。大学・学生，一般，地方行政，栄養士会，スローフードを進める NPO 法人のコラボレーションはこれまであまり聞いたことがなくユニークなものではないかと思えます。このような協力連携は単に食育のみならず地域起こしにもつながる多様な可能性を秘めています。是非次のステップに発展させていきたいと思えます。

三重スローライフ協会の活動も3年目が終わろうとしています。松阪市が管理するベルファームの運営を来年4月から担当することになる(株)松阪協働ファームに当協会も参画することになりました。3年目にしようやくスローフードの種まきを含め、活動の拠点を充実させられる条件が整ってきました。ここまで多くの人たちのご協力に感謝申し上げます。さらにみなさんと共に歩んでいきたいと思えます。(機関誌第8号, 2006.12.25)

⑧ 「総評—未利用食品循環資源を利用した地域産業の育成に向けて—」

1970年代1980年代の世界的な経済成長は多くの人たちに物質的な豊かさをもたらしてきた反面、それに付随してさまざまな生活環境問題が露見するようになり、社会の持続性に関して危惧が生まれてきました。この問題に関する人々の関心を喚起したのは、日本の提案によって設けられたという国際連合の「環境と開発に関する世界委員会」(WCED=World Commission on Environment and Development, 委員長のブルントラント・ノルウェー首相(当時)の名前から「ブルントラント委員会」と通称される)が1987年に発行した最終報告書“*Our Common Future*”(邦題『地球の未来を守るために』, 通称「ブルントラント報告」)です。

その後、1992年にブラジル連邦共和国のリオ・デ・ジャネイロ市において「環境と開発に関する国際連合会議」が開かれ、持続可能な開発を旨とする「アジェンダ21」が採択されたことによって各国での具体的な行動に拍車がかかりました。日本でもこの翌年の1993年11月に持続的な発展の基礎となる「環境基本法」が公布され、さらに具体的な資源循環型の持続的社会をめざした「循環型社会形成推進基本法」の成立は7年後の2000年6月でした。この同じ6月に私たちの取り組みの法的バックボーンにもなっている「食品リサイクル法」(食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律, 2001年5月より完全施行)も施行されています。

今年がブルントラント委員会から20年目にあたります。持続可能な社会の形成について一般的な理解は高まってきているとはいえ、これまでの歴史的な経過をみても分かるよ

うに安易ではない方向への社会の改革は時間と手間がかかるものです。高度経済成長からバブル経済に向かって支配的になっていったお金中心、物中心の経済行動は、バブル経済がはじけて見直されてきました。私たちのリキッド飼料の事業化も日本で初めての試みの部分があり、現実的に解決しなければならない諸問題がありますが、飼料化と堆肥化の連携、未利用資源の地域的利用、資源循環のネットワーク化、食育との連携などこの事業から未来への多くの発信ができる可能性が含まれています。

私たち NPO 法人三重スローライフ協会の「未来に向けてより望ましいライフスタイルを提案すること」という目的は、ブルントラント報告の「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」という理念に繋がるものであることに誇りを持ちこの事業を進めていきたいと考えています。運動や新しい方向付けにとって大事なのは考え方や理念です。欲望を振り払えないのも人間なら、現状を少し我慢して将来世代のために動けるのも人間です。歴史の大道に沿って私たちの運動を少しでも広げていくために多くの人々の知恵をさらに結集させていきたいものです。〈機関誌第9号, 2007. 3. 1〉

⑨ モノを活かして使う修理修繕の復活を一ハレとケの中に昔の人の知恵を学ぼう

すでにご承知のように4月からベルファームの管理運営を任された松阪協働ファームの一翼として私たちスローライフ協会は食育・緑育につながる講座やイベント、まだ不十分ながらも運動性・社会性のある農村市場やショップのあり方への関与を始めています。この拠点ができたことによって会員の皆様が積極的に協力していただける場面ができ、イングリッシュガーデンの無料化対応の中で生まれてきた、園内管理のボランティア協力も得られて、新しい輪がいろいろと生まれていることはたいへんありがたいことです。

ところでベルファームはごくたまに来て楽しむところというより、時間があれば来るといふ日常的な空間といえます。それだけに日々の生活につながるスローライフの仕組みを提案していきたいと思います。そのひとつは「修理修繕をしてモノを長く活かして使おう」という提案です。

実はほんの半世紀ほど前まではどの地域にも鋳掛け、包丁研ぎ、傘修理等々、モノを直して長く使う伝統と仕組みがあったのです。ところが経済の近代化に伴って大量生産、大量消費、結果としての大量廃棄が常態化することになりました。循環型社会という言葉が定着してもまだこの生産生活のシステムの基本は変わっていません。確かに金目と当座のことを考えれば包丁でも切れなくなれば新しいモノを買えばよいとなり、自転車ですらパ

ンクするとその場に捨ててまた新品を買う人も出てきます。

このような流れの中で当然のことながら修理屋や自転車屋すら成り立たなくなり、お店が少なくなってきました。本来なら少し直せばさらに使えるモノを捨てるので廃棄量は少なくなっていくません。

現在のリサイクル運動でもその基本的なシステムを変えることは意識しないでやっていることが多いので、ゴミの総量の減少に繋がることは難しいのです（この点では徳島県上勝町の取り組みはたいへん参考になります）。

ここでは例えば会員の鈴木さん（竹とんぼの名人で家電修理もされます）の包丁研ぎなどが修理修繕コーナーに定期的に出していただければと考えています。私も20年前にタイの田舎の鍛冶屋で100円で買った包丁（それ自体が当時は廃鐵の再生品）が彼の手で見事に蘇り感動しているところです。

さらにここには、衣類のほころびその他を直せるミシンを扱える人も欲しいところです。おられれば是非事務局に連絡してください。ミシンに関しては私も最初の結婚に失敗して子ども二人育てていたとき少し使っていましたが、今は余裕が無くて押し入れの中です。

ほんの40—50年前まで修理修繕は日常的なできごとで、モノは可能な限り長く使ったのです。普段は質素に耐えてもくもくと生活することによって、例えば祭りの夜店でお父さんが新しく買ってくれた何十年ぶりの包丁は？ とてもうれしく大事にしたものです。

日常の質素な食事と盆正月・祭りなどのハレの食事、その対比が大きいからこそハレの喜びも大きかったのだと思われます。もちろん当時の人が倫理的に立派だったのかどうかは別です。そのような方法で生きるしか無かったともいえますが、ハレとケのリズムが生きていました。それは言葉を換えれば人々の欲望の抑制と解放のバランスでもあったのです。今のように何でもいつでも手にはいると感動は少なくなるし、感謝の心も起きにくいでしょう。

結果的にモノを大事にしないどころか人間をも大事にしない現象が確実に以前より増していると思われます。そのような生き方では自然や親や周りの人々への感謝や自然への畏敬あるいは謙虚さは出てきにくいでしょう。人生いろいろなことがあっても最後は周りの人に「ありがとう」といって死ぬる人生の方が残された人もどんなに救われるのでしょうか。〈機関誌第10号，2007. 8.25〉

⑩ 健全な地域と仲間づくりから心身の健康を創りあげよう

—ネイチャーフィットネスを活用した健康創りの意味—

スローライフ協会は設立後5年目に入ろうとしています。設立以来、わたしたちは「未来に向けてより望ましいライフスタイルを提案すること」を目的として活動してきました。その望ましきの方向性は自然と地域とヒトを大事にすること、すなわち、自然に戻り、地域に立ち返り、生物としての人間を振り返ってみることを目指しています。それは20世紀後半の日本や近代社会が自然を破壊し、グローバル化で地域を衰退させ、そしてヒトもモノに類して大事に扱ってこなかったからです。

この間私たちは運動と事業の両立をめざして、いくつかのプロジェクトの採択などさまざまな試みと活動を行ってきました。イベントその他に参加いただいている人々からはそれなりに好評もいただいています。しかし、未だとても初期の目的を達成しているとはいえないのですが、それでも支援していただいている少なくない人々とは、今の世の状況を将来世代のために変えていくこと、何とかできることをしていきたい、という思いの共通性でつながっていたのではないかと思います。

幸いにも、2006年後半に協会の事務局を置かせていただいているベルファームの指定管理者に、株式会社「松阪協働ファーム」を設立して応募し、その一翼としてこの一年活動してくる中から新たな活動展開の可能性が生まれてきました。ベルファームという公共性の高い施設に、NPO 法人スローライフ協会が加わることによって市民の目線を失わないで、それを事業として成り立たせていくためのノウハウをもつ会社等と協働していくことで新たな可能性が生まれつつあります。

ベルファームの指定管理者としての二年目の試金石となる2008年度の新規取り組み企画は「ネイチャーフィットネスを活用した健康創り」です。

ベルファームの開放感たっぷりの自然環境を活かして、人工的な機械器具に依存し、一人ひとりが孤立して歯を食いしばって行ういわゆるフィットネスではなく、自然の環境と自然の素材から創った器具を利用して、それぞれの体の状態に合わせた適度な運動量を基準にして、みんなと共楽しく自然の風を感じながら、健康な心身を創り、維持していくネイチャーフィットネスを拡げていきたいです。健全な心身は栄養（食）と運動（フィットネス）と休養（睡眠・休息）のバランスが大事だと云われます。体の状態を、そして運動後の状態を、ドクターフィットネス？ という最新の技術を利用しながら、一人ひとり管理し、健全な体を創るための運動や食の処方と一緒に考えていければいいなと考えています。

スローライフ協会としても今年は単に高邁な理想だけではなく、一人ひとりにとっても切実な課題である「一人ひとりの心身の健康」に資するようなライフスタイルの提案を中心課題にしていきたいと考えています。栄養や生活環境の改善、医療の発達などにより、ヒトの平均寿命は随分と長くなりましたが、反面生活習慣病の増大やガンの蔓延、過労や孤独死など一人ひとりの健全な生活やより良い生き方 *wel-being* がより切実に求められる状況があるからです。そしてその目標がよりよく達成されるには、自然のより良い環境を創設し（緑育）、地場産物を活かした健全な食事を取る（食育）ことも大きな関連をもってきます。さらには一人ひとりの健康創りを、地域的につなげていくことで、地産地食、平凡人生、天習地学、農家市場や特産物づくりを通じた農村産業の振興につなげ、ゆくゆくはバイオマスや自然や緑育活かした自然活用の種まきにもつなげていきたいものです。

ここで NPO 法人として力を発揮できれば、全国に先駆け今後の地域社会のあり方に重要な一石を投げられるのではないかと考えています。〈機関誌第11号, 2008. 3.10〉

5. 簡単なまとめと三重スローライフ協会の位置づけ

2006年1月後半の海外出張の際、訪問する時にはしばしば立ち寄るバンコクの本屋で、たまたま「In praise of SLOW（ゆっくりの賞賛）」という本を見つけた。この本を、一定時間に多くの仕事をこなそうとしてギリギリの旅行計画を立てたがゆえに、ホーチミンからの飛行機が2時間弱遅れてセントレアへの深夜便に間に合わなくて一日待たされた空港内のホテルで読み始めたのも何かの暗示かも知れない。

巨大になりすぎたタイ航空の少し失われた感のある乗客へのサービス精神の退化もまた巨大でファースト（邁進）資本主義の反面教師ではあるが、同時にゆとりを失っていた自分を見直すいいチャンスを与えられたものと思い、航空会社の不手際への怒りを収めることができたのである。

そういえば目の前にある仕事を一生懸命こなし、消化をしているような毎日の中で久しぶりに外国語の読書という知的刺激を与えられたものともいえる。この本には、20世紀後半の農業の変化、私たちの生活の変化をここ十年あまり私なりに検討し続けてきたこととあまりにも似た認識が書かれていて、ほっとすると共に、スローライフ運動をより適切に進めていくことの大きな後押しと感ずることができた。

この本が2004年に発売後多くの歓迎書評を得て一躍有名になったことは、昨今の産業や生活におけるスピード競争に私たち人類の多くが巻き込まれていることの問題性が世界的

にも共有されつつあることを示している。確かに発展途上国ですら、著者 Carl Honore が副題に付けている「How a worldwide movement is challenging the cult of speed（スピード崇拜への世界的な挑戦運動）」の影響が現れつつあるのを感じる。2005年末の江蘇農林技術学院での講演でも、2006年1月のベトナムのカントー大学でのスタッフ40名への講演でも、歴史的な時代の方向性を指し示すために、半ばおそろおそろスローライフ運動の話を加えたのだが、途上国では理解されにくいのではないかという心配に反して、何人もから質問も受け、その考えに共鳴したとの意見をもらったことにも現れている。

内容を詳しく紹介するスペースはないが、著者のホノレの述べたいことは、今や世界共通の課題になっていて、私たち三重の田舎で取り組んでいることにも現代社会の課題への挑戦であることが明瞭に読み取れるのである。ホノレは言う。これはスピードへの挑戦ではない。インターネットやジェットなど現代技術がもたらした恩恵から離れて私たちは生きてはいけない。しかし、問題は何でも速くということに心を奪われすぎて、急ぐ必要の無いときにも絶えず急かされていたり、速く作ることに気をとられて品質保持が不十分であったり、燃え尽き症候群や過労死が増えたり、急ぐ社会への不適応による心身障害が増加したり、といった望ましくない症状が増えすぎていることである。平均の睡眠はこの100年に90分も減少したと言われ（ホノレ、9頁）、人びとの疲労が常態化したりしているという。

今の世の中は基本的に資本主義社会であって、確かにお金がないと不便の上ないのであるが、しかしながら人びとが生きていく上で、お金や経済が総てになるのではなく、人びとの幸せや生きがいをお金や経済との適切なバランスの中で見いだしていくために、何が大事なのかを、基本に戻って振り返り、みんなで探求していくことが必要なのではないかと思われる。NPO 法人三重スローライフ協会の活動は、このようなポスト産業社会のライフスタイルのあり方に一石を投じる地方からの運動として十分注目に値するものであるといえる。そしてその背景にはスローライフ、スローフードと名を打たなくてもこれに繋がる様々な動きが世界的に見られることが重要である。

注

- (1) NPO（特定非営利活動）法人三重スローライフ協会の設立趣意書等による。
- (2) 活動の要の事務局長は現在3代目である（立岡茂 2004. 1～2005. 2, 中西与志嗣 2005. 3～2005. 6, 岩森政明 2006. 7～現在）
理事長（大原興太郎 2004. 1～現在）副理事長（山田朋一 2004. 1～2008. 6, 寺添

幸男 2008. 6～現在, 平松俊範 2008. 6～現在) の他, 理事 (当初17人, 現在9人) は2008. 6に約半数が入れ替っている

主な引用・参考文献

- [1] 島村奈津『スローフードな人生!』(新潮社, 2000年7月)
- [2] 辻信一『スロー・イズ・ビューティフルー遅さとしての文化』(平凡社, 2001年9月), ニッポン東京スローフード協会編『スローフード宣言 イタリア編』(木楽舎, 2001年12月)
- [3] ニッポン東京スローフード協会編『ニッポン東京スローフード宣言!』(木楽舎, 2002年10月)
- [4] 金丸弘美『本物を伝える日本のスローフード』(岩波書店, 2003年8月)
- [5] 金丸弘美・石田雅芳『スローフード・マニフェスト』(木楽舎, 2004年2月)
- [6] 大谷ゆみこ『スローライフ, スローフード』(2004年4月)
- [7] 辻信一『スローライフ100のキーワード』(弘文社)
- [8] Carl Honore 'In praise of SLOW'
- [9] 三重スローライフ協会機関誌及びパンフレット

【資料1】

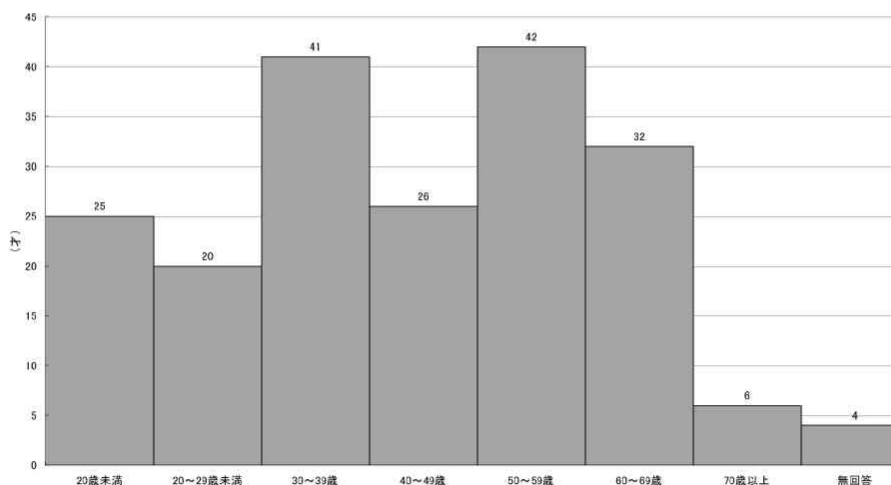
アンケート調査の結果から食生活の実態を知る

H19年9月～10月までの間、NPO 法人 三重スローライフ協会は食育プロジェクトの一環として、「現代人の食生活の実態を明らかにし、食生活改善方策を探ることを目的として」、一般社会人（196名）に対して、「食生活に関する」アンケート調査を実施した。

配布された調査票は ①調査対象者の属性 ②食に対する関心 ③食生活の現状 ④中小学校時代の食習慣 ⑤食に関する知識・技術・経験 ⑥理想の食卓の六つの部分、計20の設問によって構成されている。その結果について重要だと思われる部分を会員の皆様と「情報共有」のため、以下のように簡単にまとめた。

1. 調査対象者の属性

まず、年齢構成をみると、「30～39歳」と「50～59歳」層が比較的に多く、それぞれ全体の20.9%と21.4%を占めている。その次に多いのは「60～69歳」（16.3%）である。「20歳未満」層と「20～29歳」層はそれぞれ12.8%と10.2%を占め、最も少ないのは「70歳以上」であり、全体のわずか3.1%しかなかった。この結果から、今回の調査対象者の年齢分布は、「70歳以上」層を除けば、大きな偏りもなく、比較的にバランスよく分布していると思われる。



問1 調査対象年齢分布図

次に、性別と職業については、まず、「性別」については「女性」が6割程度（118名、

60.2%) 男性は3割強(72名, 36.7%)であった。「職業」については、「会社員」(56名, 28.6%)と「主婦」(53名, 27.0%)が最も多く、両者合わせると半分以上を占めるようになる。その次に多いのは「学生」(26名, 13.3%), 「パート・アルバイト」(19名, 9.7%), 「自営者」(15名, 7.7%), 「無職」(13名, 6.6%), 「その他」(7名, 3.6%), 「農林漁業者」(4名, 2.0%), 「無回答」(3名, 1.5%)の順となっている。

問4 住居形態

住居形態	実数(人)	割合(%)
①1人暮らし	13	6.6
②夫婦のみ	31	15.8
③夫婦と子供・夫婦と両親	108	55.1
④三世同居	26	13.3
⑤その他	14	7.1
⑥無回答	4	2.0
計	196	100.0

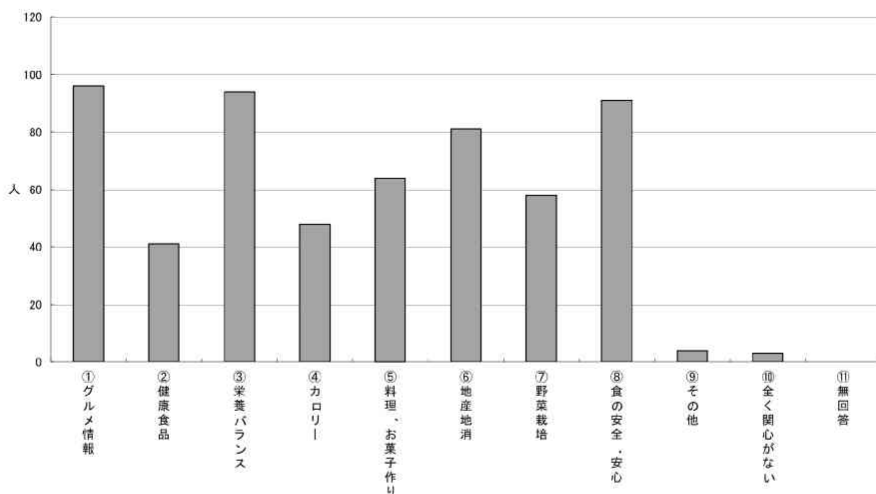
「住居形態」については、「夫婦と子供・夫婦と両親」といういわゆる「標準世帯」は半分以上を占めている。近年、世帯員の僅少員化でよく指摘されている「1人世帯」と「2人世帯」の割合(両者の合計)は22.4%であり、これは、全国の2000年現在の値(「1人世帯」, 「2人世帯」両者合わせて一般世帯総数に占める割合は52.7%)よりかなり下回っている。さらに、上記の数値からわかるように、今回、アンケートに協力してくれた方の中に、「三世同居」の世帯は26名も存在し、全体の13.3%を占めていることがもう一つの特徴点である。

2. 食に対する関心

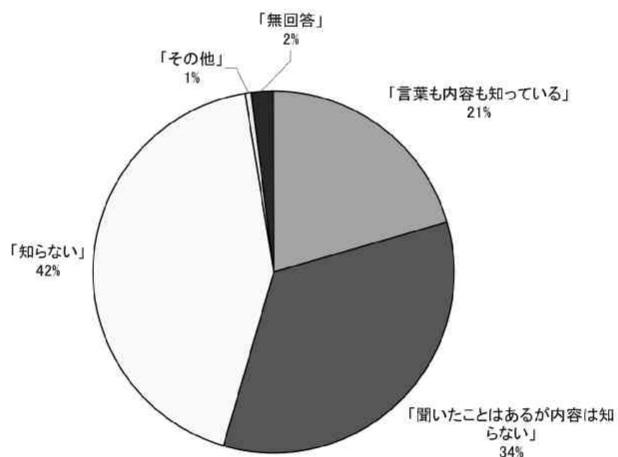
食をめぐる関心事については、「グルメ情報」, 「栄養バランス」, 「食の安全・安心」の三つに関して関心が非常に高く、その次に、関心が高いことは、「地産地消」, 「料理・菓子作り」, 「野菜栽培」となっている。それから「カロリー」, 「健康食品」の順位となっている。

さらに、「食事バランスガイド」(問7)の周知度について尋ねたところ、「知らない」と答えた人は半分以下であり、知っている人は半分以上を占めている。その中で、「聞いたことはあるが内容は知らない」は66名で、全体の34%を占めているが、「言葉も内容も知っている」人は40名にものぼり、全体の21%を占めている。

地方におけるスローライフ運動のねらいと意義（大原）



問6 興味のあるものは何ですか



問7 「食事バランスガイド」の周知度

3. 食生活の現状

平成15年度に厚生労働省が実施された「国民健康・栄養調査」の結果によると、朝食欠食率は、「15—19歳」層は男性14.0%、女性17.2%。「20代」層は男性29.5%、女性23.6%。「30代」層は男性23.0%、女性12.7%。「40代」層は男性15.9%、女性7.6%、「50代」層は男性10.0%、女性6.7%、「60代」層は男性4.3%、女性4.5%、「70歳以上」は男性3.1%、女性3.8%となっている。

それに対して、今回のスローライフ協会の調査結果（性別、年齢別に分けないが）は、

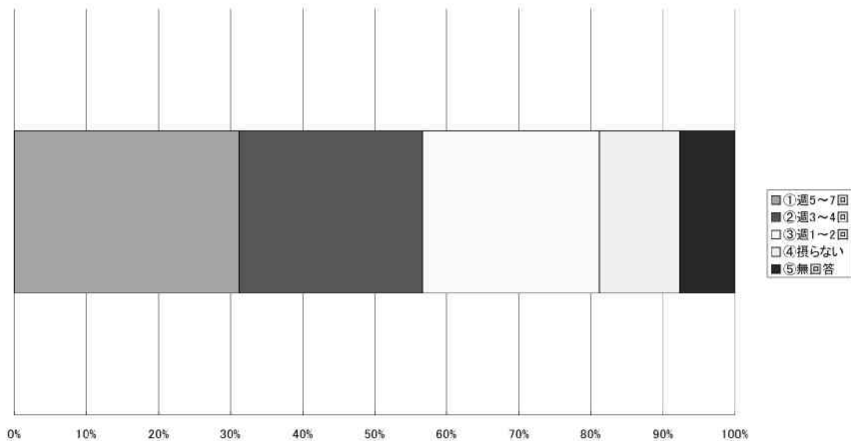
「週5～7回」、つまり、ほぼ毎日食べている人は85.2%の高い割合を占めている。「週3～4回」あるいは「週1～2回」しか摂らない人は同じ割合で4.1%である。全く「摂らない」人は少ないというものの、3.6%が存在している。欠食した理由については、選択肢の①時間がないため ②面倒なため ③食欲がないため ④ダイエットのため ⑤お金の節約のため ⑥その他のうち、①を選んだ人は一番多かった。その次は③であった。

問8 朝食を摂っていますか

	実数 (人)	割合 (%)
①週5～7回	167	85.2
②週3～4回	8	4.1
③週1～2回	8	4.1
④摂らない	7	3.6
⑤無回答	6	3.1
計	196	100.0

食生活の現状の部分においては、朝食の欠食状況のほかに、間食の摂取状況、外食の利用度およびその内容などについても調べた。

間食については、「週5～7回」とる人は3割、「週3～4回」と「週1～2回」とる人はそれぞれ25～26%、「摂らない」人は1割強である。



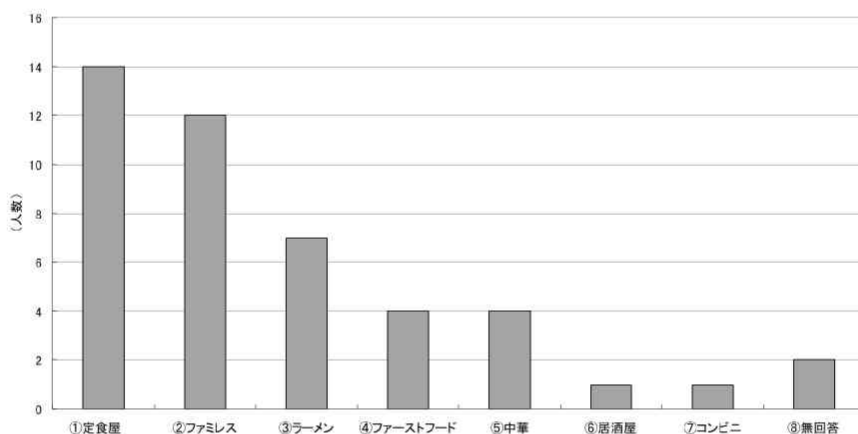
問9 間食を摂りますか

間食でよく摂取されているものを多い順で並べると、①果物 ②洋菓子 ③スナック菓子 ④せんべい類 ⑤和菓子 ⑥飲料 ⑦飴、ガム類 ⑧アイスクリーム類であった。

外食利用については、「月2～3回程度」で行く人は比較的多い(38.8%)。その次は「週1回程度」で行く人(25.0%)、それから、「週2～3回程度」(12.8%)と「毎日、ほ

地方におけるスローライフ運動のねらいと意義（大原）

とんど毎日」に行く人（5.6%）である。外食に行く人どういものをよく食べられているのでしょうか。次の結果をみればわかるように、「定食屋」、「ファミレス」、「ラーメン」がメインとなっている。これは、外食はすでに特別な存在ではなく、日常食生活に浸透されて、その一翼を担っていることを意味する。さらに、日常的な食生活の中で栄養バランスを考慮して、どういう心掛けをしているのかについて、問12～問14で尋ねたところ、気をつけて野菜、乳製品、魚を摂取したりしている人は主流であるが、その中で、あまり関心を持ってない人も全体の中で占める割合が少ないが、存在している。



問11 外食ではどのようなものを食べているのか

栄養バランスへの配慮

問12 野菜を摂るように気をつけていますか

	実数 (人)	割合 (%)
①気をつけていて野菜も摂っている	147	75.0
②気をつけているが野菜不足	35	17.9
③あまり気をつけていない	5	2.6
④その他	2	1.0
⑤無回答	7	3.6
計	196	100.0

問13 1日1回乳製品を摂っていますか

	実数 (人)	割合 (%)
①毎日、ほとんど毎日	119	60.7
②週2～3回	36	18.4
③週1回程度	17	8.7
④月2～3回程度	11	5.6
⑤その他	7	3.6
⑥無回答	6	3.1
計	196	100.0

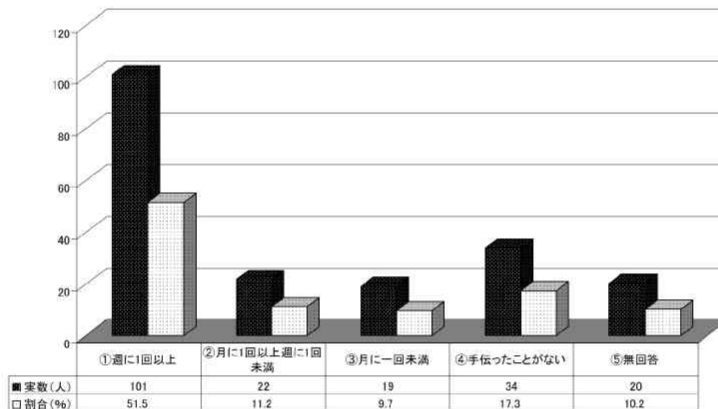
問14 魚はどの程度食べていますか

	実数 (人)	割合 (%)
①毎日、ほとんど毎日	55	28.1
②週2～3回	105	53.6
③週1回程度	15	7.7
④月2～3回程度	8	4.1
⑤その他（食べない、気が向いた時）	4	2.0
⑥無回答	9	4.6
計	196	100.0

4. 小中高校時代の食習慣

今の子供は「ほとんど家事の手伝いをしない」とよく言われている。これは、当然のことながら、「家庭」という一番身近な食に関する教育の「場」、つまり、親から子に日常生活の中で、料理に関する知識や技術を伝授するという機会を失うことになる。今回の調査はどういう結果を得られたのでしょうか。

調査結果からみれば、「週に1回以上」を手伝う人は半分以上。「手伝ったことがない」答えは2割弱となっている。この数値と今回のアンケート調査に協力してくれた方々の年齢構成とリンクして考えると、50歳あるいは40代の方は子供あるいは学生時代に比較的によく家事の手伝いをしたり、家族とのコミュニケーションをとったりしてきたが、今の20代、30代層の人はほとんどしてなかったということを表している。



問16 どのくらいの頻度で家族の料理の手伝いをしていましたか

家庭での食生活の雰囲気について（問17. 「夕食は主に誰と食べていましたか」）は、「家族全員が揃って食べていた」と答えた人は54%、「家族全員ではないが揃った者で食べていた」と答えた人は35%を占めている。両者あわせれば9割弱となる。

5. 食に関する知識・技術・経験

この部分では、主に「料理を作るときにどういうことについて気をつけているのか」と、「食事マナー」について調べた。

その結果をみると、「栄養バランス」や「冷蔵庫にある食材を使う」、そして「旬の食材を利用する」および「食べる人の好み」など項目が上位になっている。

問19 料理を作るときに気をつけることは何ですか（複数回答可）

項 目	実数（人）
①栄養バランス	91
②食べる人の好み	66
③冷蔵庫にある食材を使う	72
④塩分を控えめにする	58
⑤旬の食材を利用する	69
⑥調理のゴミが出ないようにする	14
⑦カロリー	18
⑧その他	7
⑨無回答	32

「食事マナー」についてよく言われたことの上位五つは以下のようになっている。

①「いただきます、ごちそうさまを言う」 ②「ひじについて食べない」 ③「ご飯を1粒も残さず食べる」 ④「箸の持ち方」 ⑤「好き嫌いを注意された」。

【資料2】

エコフィード事業への取り組みと限界

1. 事業の背景

(1) 社会的背景

国家の安全保障や、食育、地産地消による地域産業の活性化などさまざまなレベル、さまざまな観点から、食料自給率向上の必要性が叫ばれているが、我々の食生活自体はますます欧米化し、食肉の消費量は右肩上がりに増加を続けている。これは、飼料の大部分を海外からの輸入に頼っている我々にとって、さらに食料自給率を低下させる原因となっている。

また、海外から輸入した大量の家畜用飼料は、畜肉や乳製品に姿を変えて消費されていくこととなるが、最終的には我々自身の排泄物などとして日本に留まることとなる。これを、地球規模での物質循環で捉えた場合、日本には、海外から輸入する大量の窒素やリンが確実に蓄積され続け、完全な一方的物質移動となっている。

狭隘な国土ゆえに大規模に飼料作物を作ることができない日本の現状から鑑みて、これらの問題を抜本的に解決することは難しい。しかし、養豚については、リキッドフィーディング技術によりこれまで廃棄されていた未利用資源を飼料化することで、海外に依存していた飼料を国内で賄うことが可能となり、また、排出メーカーと養豚農家を結ぶ新たな循環系が形成されることで、このような問題の一端を解決することが可能である。

食品系廃棄物の排出メーカーは、食品リサイクル法の施行などもあり、未利用資源を含

む廃棄物の有効活用に積極的に取り組んでいるところであり、その手段として、比較的容易に実施することができる堆肥化を選択することが多い。しかし、排出される廃棄物の内容や気温変動に左右されない品質を確保するためにはある程度の技術的、経済的投資が必要であること、また、年間を通じて堆肥を安定的に消費するユーザー（農家）と連携する必要があることから、持続的な運営に問題を抱えることが多い。また、堆肥の製造は、エネルギー効率の観点からは必ずしも効率的な処分方法とはいえないことから、廃棄物発生の原因者として社会的責任を果たすためには、経済的かつ効率的な新たな手法を選択する必要がある。また、養豚農家は、経済的優位性から、飼料の大部分を輸入に頼らざるを得ないが、これらは必ずしもトレーサビリティの高いものばかりではない。トレーサビリティは、農食品産業においてその安全性を証明する要素として欠かせないキーワードとなっており、養豚農家としても、安価でトレーサビリティの高い飼料を求めているのが実情である。

リキッドフィーディングは、排出するメーカーによりそれまでのプロセスのトレーサビリティを確保されている可能性が高く、かつ安価な飼料を養豚農家に提供することが可能となることから、その事業化が養豚農家にもたらすメリットは大きいと期待されている。上記のような現状を踏まえると、リキッドフィーディングは排出者とユーザーの両者に対してメリットを生み出す技術として有効に機能することが可能である。

(2) 協会としての取り組み方針

NPO 法人三重スローライフ協会（以下「協会」という。）は、定款の中で活動方針を下記のように記している。

「地域の中で人々に望ましいライフスタイルを提案し、その実現に向けた活動をすすめる中で、食農教育・地産地消運動に関する事業を行い、食、農、環境に対する意識を向上させると共に、地域資源を地域の中で安全に循環させる仕組みを形成する事を目的とする」

本事業は、この協会の活動方針を、まさに具体化していく案件であり、大きな精力を注いで活動するべきと考えている。また、協会会員には、現在法人・個人含めて300の会員が存在するが、その中には、未利用資源を排出する側の企業、受け皿となる養豚農家、研究機関等も含まれる事から、NPO がネットワークを仲立ちする機能を果たす事で、以下に述べる事業の目的を果たすのにふさわしい事業主体である。（協会としての取組は、別紙協会広報誌を参照。）

2. リキッドフィーディング事業の目的

(1) 最終的な目的

リキッドフィーディングの事業化に対する社会的意義は極めて高い。また、産業界においても、未利用資源を排出するメーカーは、産業廃棄物の処理に多額の費用を掛ける必要がなくなる。養豚農家にとっても安価な飼料が安定的に入手できることから、それぞれにメリットを享受できるシステムである。

スローライフを標榜する当法人は、リキッドフィーディングを今後の循環型社会の形成に欠かせない技術として注目し、この事業化、すなわち「排出メーカーから収集する優良な未利用資源を原料として、安定した液体飼料を製造し、輸入飼料の代替が可能な価格帯、品質で販売する」という事業の成立を最終的な目的とする。

(2) 平成18年度の成果目標

事業化に向けて解決すべき問題は多いことから、平成18年度は、この準備段階として、リキッドフィーディングを媒介とする関係者に啓蒙活動を行いながら、以下5項目の成果目標を掲げ、これを達成することをしたい。

- ① 事業化に向けて必要となるリキッドフィーディング関係の専門技術を習得・確立する。
- ② 事業開始後に利害関係者となる排出メーカー、養豚家と収集運搬に当たる産廃業者とネットワークを構築する。
- ③ 市民への広報活動に取り組む。
- ④ 事業主体となる組織を立ち上げる。
- ⑤ 行政機関との連携に筋道をつける。

3. リキッドフィーディング事業の概要

1) 実施概要

先にも述べたように、協会は、最終的にリキッド飼料の事業化を目指しているが、先例の少ない事業だけに、そこにたどり着くまでにクリアすべき課題は多く、一足飛びに事業化することは困難である。そのため、平成18年度を、事業化に向けた準備期間と位置づけ、先に掲げた5つの成果目標を達成するべく、以下の事業を実施した。

(1) 専門技術の習得・確立

実施事例が少なく、学術的な文献もあまり蓄積されていないことから、取組当初はどのような技術が必要になるかをリサーチすることから始める必要があった。そのため、すで

に事業を実施している先進地を視察し、リキッドフィーディングの全容を把握するとともに、抱えている問題点や、実施にあたって特に留意すべき点などの確認を行った。

また、事業に携わっている担当者を講師に招き学習会を開くことで、より多くの基礎的な情報を収集することを今年度の活動とした。さらに、さまざまな未利用資源の活用を考えた場合、有価物を買入れるだけではなく、受け入れの段階で処理費用をもらうことが出来ることが望ましい。このためには、産業廃棄物の収集、処理についての許認可や知識が必要不可欠になることから、所定の研修を受講し、「産業廃棄物取扱い免許」の免許を取得することとした。

(主な活動)

- ・先進地視察
- ・リキッド飼料化研究会
- ・産業廃棄物取り扱い免許の取得

(2) ネットワークの構築

リキッドフィーディングのシステムを円滑に運営していくためには、立場の違う関係者がそれぞれメリットを共有できるネットワークの構築がポイントとなる。そこで、リキッド飼料化研究会を立ち上げ、排出メーカー、運送業者、養豚農家のほか、行政の関係の方々、リキッドフィーディングに関心のある法人、個人に幅広く参加を呼びかけることとした。また、先行事例として参考にしてている岐阜県高山市の農場では、「有限責任中間法人資源再生ネット」が排出メーカー、運送業者、養豚農家を含んだ約50社のネットワークを構築しており、定期的に会合(飼料化委員会)を開いて現在稼働しているリキッドフィーディングシステムの稼働状況や、問題点について情報共有を図っている。現在稼働しているリキッドフィーディングの問題点について有用な情報を入手できることから、ここに参加し、情報を収集するとともに、排出メーカーや運送業者とのネットワークを広げることとした。さらに、協会の構成員それぞれが、NPO 法人のメンバーという以外バックグラウンド(本業)をもつことから、本業を営む中で、食品製造業者や養豚関係者と接触するなかでリキッド飼料の存在を知らしめ、潜在的な協力者の発掘に努めることとした。

(主な活動)

- ・リキッド飼料化研究会の運営
- ・愛知で開催の定例会議(飼料化委員会)のメンバー委員として登録参加
- ・構成員個人ベースでの営業活動

(3) 広報活動

我々が想定するリキッドフィーディングシステムは、三重県内の養豚農家が裨益するだけでなく、日本全国に広がる可能性のある取組であると考えている。その可能性を具現化するためには、リキッドフィーディングが単なる経済活動ではなく、循環型社会を形成する上で重要な役割を担うことを認知してもらうことが、システムの普及にとって重要であると考えている。このため、リキッド飼料化事業への理解や参加を積極的に呼びかける活動を行うこととした。

まず、リキッドフィーディングをより直感的に分かりやすく理解していただくため、一般消費者に向けてイベント（試食会）を実施し、リキッドフィーディングの取組を分かりやすく解説したパンフレットを作成、配布することとした。

また、新聞社等のマスコミに積極的に働きかけ、パブリシティーを通じて協会の活動を告知することで、リキッドフィーディングの存在を知らしめるとともに、潜在的な関係者や協力者の発掘に努めることとした。

(主な活動)

- ・地域イベントへの参加，試食会の開催
- ・パンフレットの作成，配布
- ・マスコミへの情報提供

(4) 事業主体の確立

会社法が改正になったこと等から多様な事業主体を選択することが可能となったが、本件のように多様な立場の関係者が同一の目的を持った事業主体となるとときにふさわしいスキームを、それぞれのメリット、デメリットを比較することで検証した。

(主な活動)

- ・事例研究
- ・事業主体に関する勉強会

(5) 行政機関との連携構築

リキッド飼料化事業を実施するにはある程度の設備投資が必要となるが、資源循環の促進という社会的意義の高い事業であるため、一定の助成金を活用することが可能であると考えている。また、廃掃法や産業廃棄物処理法等の許認可業務については、行政関係者から情報を得ることが必要不可欠である。このため、事業内容を行政機関にPRし、協力関係を構築することで、スムーズに事業を立ち上げることが可能であると考えている。具体的には、情報の共有化を図るため、先進地視察や勉強会などに参加を要請し、助成金や産

業廃棄物の担当部署へ赴き、ヒアリングを行うこととした。

(主な活動)

- ・共同先進地視察
- ・助成金，その他許認可関係のヒアリング

4. 成果概要

平成18年度の成果目標は上記5項目である。これらの成果を概観すれば、7割程度の成果であったと評価している。もっとも大きな成果は、リキッド飼料化工場を設計するにあって検証が必要となる技術的な課題が整理できたこと、ならびに、リキッド事業を立ち上げた場合の工場予定地を確保できたことにある。当初の予定では、平成18年度を助走の期間とし、平成19年度は、出来るだけ速やかに事業実施にこぎつけたい意向であった。しかし、事業主体の整備など、事業実施に不可欠な大きな課題が残されたことから、平成19年度もこれら残された課題に対して整理が必要である。このため、全体の成果達成状況としては7割程度とした。成果目標のそれぞれの項目については、その成果を以下に述べる。

(1) 専門技術の習得・確立

この成果を得るために、リキッド飼料化研究会での活動と、先進地視察が中心となった。これらの活動により、リキッド飼料化事業を実施するにあたって留意しなければならない事項について、確認と整理が出来た。

(2) ネットワークの構築
リキッド飼料化研究会の実施回数は当初の計画より少なかったものの、視察の際に協力を要請したり、設備メーカーを紹介してもらうなどによって、技術的なサポートを得られるネットワークは構築できた。排出メーカーや輸送業者については、構成員のそれぞれが個別の場で積極的な営業活動を行ったことから、協力の意思を表示しているメーカーは多数確保できた。事業の詳細が決定しておらず、具体的な条件に基づく契約締結等には至っていないため、引き続き接触を続け、ネットワークを拡大していくこととしたい。

(3) 広報活動

マスコミ関係に積極的にアプローチすることで、新聞記事にて扱われるなど、社会的な関心をひきつけることができた。また、リキッド豚の試食会などを実施し、イベントに参加した一般の参加者からも大きな関心が寄せられるなど、「リキッドフィーディングシステムを世に知らしめる」という点においては一定の成果を得た。協会の広報誌でもリキッ

ドフィーディングの記事を掲載し。会員に対してリキッドフィーディングの有用性、重要性を訴えた。

(4) 事業主体の確立

今年度中に事業主体の設立を見込んでいたが、残念ながら達成されなかった。株式会社、LLP（有限責任事業組合）等も検討したが、それぞれのスキームの長所、短所を分析し、最終的には事業協同組合で事業を実施することとした。事業協同組合の設立には速やかに必要な条件を満たし、速やかに立ち上げることをしたい。

(5) 行政機関との連携構築

行政サイドとしても、資源循環や食料自給率に貢献するリキッドフィーディングには関心が高いことから、当組合から事業内容を積極的にPRすることで、行政との連携関係が構築できた。引き続き堅持して、スムーズな事業の立ち上げに活かしていきたい。

〈補 足〉

この経済産業省のプロジェクトは三重県におけるエコフィード事業の広域的な展開を目指して取り組んできたが、受け皿としての養豚農家、養豚経営側の経営問題や、農地取得問題などでスムーズにいかずペンディング状態が続いている。